

伊勢のごせんぐう

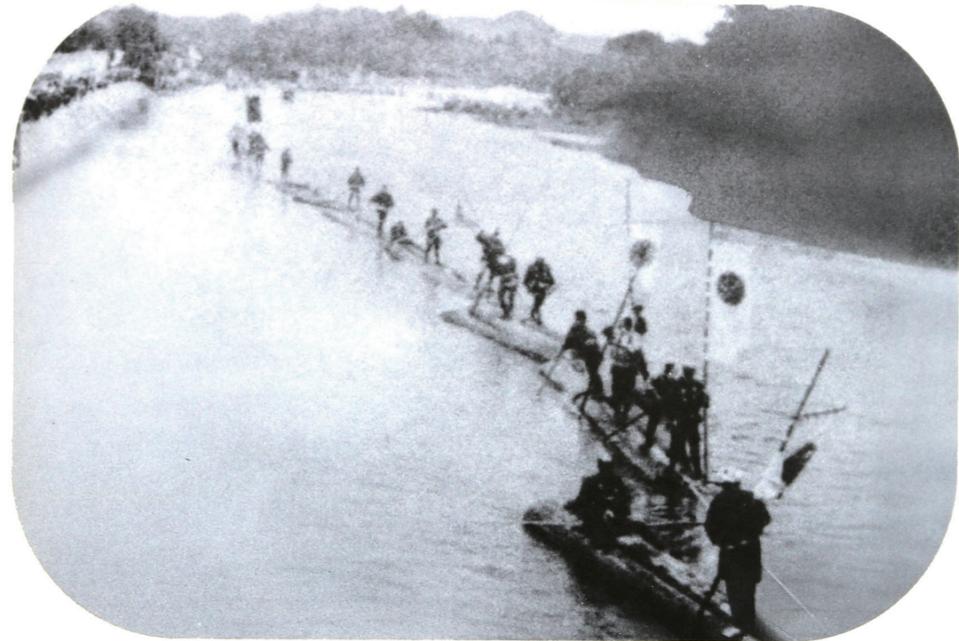
伊勢の伝統文化を伝える

昔の一枚

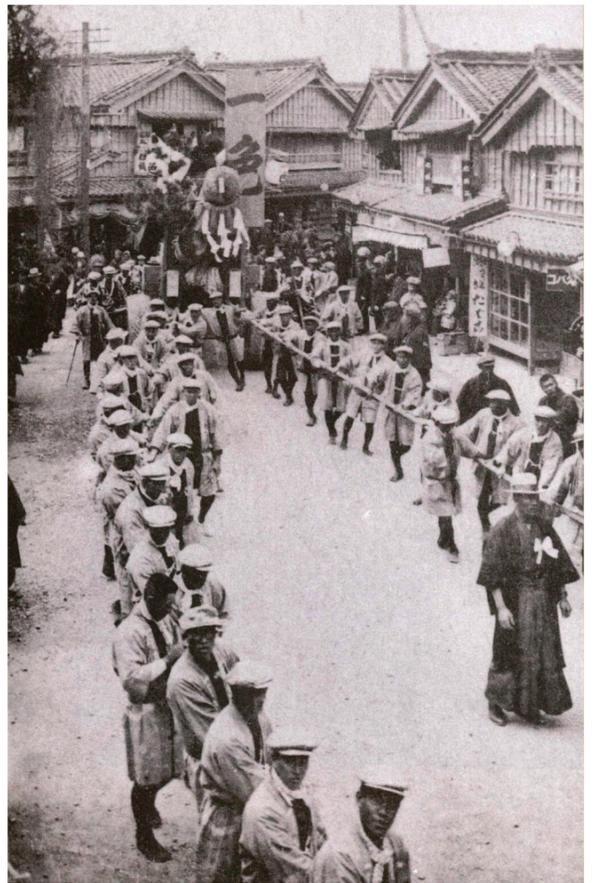
伊勢の民俗行事

お木曳きひき

500年以上の歴史がある伝統行事「お木曳」。神宮にご用材を運び入れる
労役が、いつしか伊勢の町衆により町ごとが競い合うような、伊勢ならではの
特別な民俗行事になりました。



川曳(明治時代の様子)



陸曳(大正時代の様子)

知っておきたい、伊勢のこと

天皇陛下のご譲位に 平成の時代への感謝

先日、天皇陛下の譲位
(退位)の御意思を受け、
平成31年4月30日には天
皇陛下のご譲位、5月1日
に皇太子殿下が皇位継承
されること発表されま
した。明治、大正、昭和と、
平成の時代、一番の違いは
他国との戦争がない、その
名の通り「平和の御代」で
あったことではないでしょ
うか。30年の間、様々な事
を乗り越えて、こうして新
しい世を迎えられることは
国民として素直に喜ぶたい
ものです。

年が明けると譲位即位
の準備が始まります。平
成30年は、平成の御代に感
謝し、次代へ、日本の未来へ
とつなげていく節目の年。
日本中にお祝いの気運が高
まるかつてない機会です。
内宮に祀られている天
照大御神は皇祖神といわ
れ皇室の最初の祖先とさ
れているのはご承知の通り

明治、大正時代のお木曳

昔、伊勢は神領といわれ、地元に住まう
「神領民」はその役割として神宮へのご奉
仕を行ってきました。中でも式年遷宮に
伴うご用材の運搬作業、550年以上前
から継続されている「お木曳」は、大変な
労働でありながら崇敬の意をもつ神領
民の榮譽とされてきました。昨今は1〜3
本の木を積むことが普通ですが、実質的
な運搬を担っていた時代は、一度に何十本
も積んで、その技術を競ったり、必要とあ
れば昼間だけでなく夜曳も行われたり、
期間も長く何か月もかけて行われるな

ど、総出で労をいとわずという時代もあつた
といえます。とはいながらも、江戸時代にはそ
れぞれの飾りや衣装など、町々の個性が発揮さ
れ、ずいぶん華やかなものになっていました。
そして明治時代には、ご遷宮は新政府国家
が行うものとなり神宮独自の用材搬入が進め
られました。神領民が願って奉仕の民俗
行事として継続して実施されるようになったと
いう記録があります。当時はまだまだ労役奉
仕の必要性は高く、大正時代の第58回お木曳
は3次(春から夏の期間のみ3年間)に渡り、最
大規模の奉仕となりました。

神話の時代から現代まで続く日本文化の伝承

が続いています。皇室と神
宮とのつながりは、ただ、皇
祖神であるからということ
ではありません。代々、天皇
陛下はご自身で、宮中にお
いて祭典等を行い、神宮の
お祭りと同じように神恩
を感謝し、国の安寧、国民の
幸福を祈ることを重要なお
つとめとされています。

献されます。そうして日本
古来の文化、大切な心が伝
承されてきました。二十年
ごとに繰り返される式年
遷宮も同様に千三百年の
伝承をもつ神事です。

平成の最後の年に 伊勢の民として感謝を

天孫降臨の神話では歴代
天皇陛下に継承される「三
種の神器」とともに天照大
御神から「稲穂」が託され
たとされています。米をつ
くる暮らしが、この国の繁
栄と平和をもたらすとの
教えからはじまり、お米を
命の糧として国を建て、稲
作を営み、神々を祀り豊作
を願いました。毎年神嘗祭
には陛下ご自身が皇居で作
られた御初穂も神宮に奉

伊勢は、神領とされてい
た時代はもちろん、ご鎮座
以来、神宮の歴史とともに
歩んできたまち。この地に
生きる人々は、日常的にま
た遷宮行事などを通じ神
宮から多くのことを学び、
身近に感じさせていただ
きました。

建国以来、万世一系の天
皇が即位される他国に例の
ない歴史を持つ日本。神話
として語られる時代から現
代まで途絶える事なく国

神恩感謝の言葉通り、時
代が変わろうとしている今、
この伊勢だからこそ、平成
に生きた民として感謝の心
を表したいものです。

伊勢に生きて、新しい御代を迎えられる喜び

平成三十年は感謝の年に。

